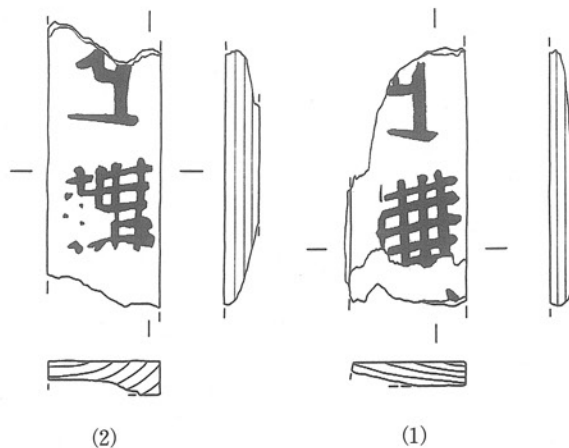




(S = 1 : 2)

岡山・百間川米田遺跡

1 所在地 岡山市米田

2 調査期間 一九九七年度調査 一九九七年(平9)四月～一

九九八年三月

3 発掘機関 岡山県古代吉備文化財センター

4 調査担当者 中野雅美・物部茂樹・加藤和歳

5 遺跡の種類 護岸施設・橋跡

6 遺跡の年代 縄文時代晩期～中世・近世

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(岡山北部)

百間川米田遺跡は、旭川の放水路として江戸時代に造られた百間川の下流域に位置する。岡山県古代吉備文化財センターでは、建設省から委託を受けて、一九七七年から発掘調査を実施している。これまでの調査結果から、百間川米田遺跡は、縄文時代晩期から中・近世に至る複合遺跡で、常に臨海性の

性格をもった遺跡として認識されている。特に奈良時代には、数多くの掘立柱建物群、「上三宅」の墨書土器、さらには「官」の刻印をもつ須恵器などから、備前国府と関係が深い「泊」の存在が考えられている。また、中世の運河と考えられる大溝が検出されており、大溝の周辺には大規模な屋敷地群が存在している。さらに、平安時代後半から室町時代にかけての膨大な量の遺物が出土している。これらの遺物の中には、輸入陶磁器をはじめ国内各地の土器が多く含まれている。これらのことから、古代末から中世においても、備前地域の重要な港町としての位置づけが考えられる。

木簡（柿経）が出土した地点は、その港町から北西約四〇〇mに位置する。今回の調査区では、南西から北東方向に流れる幅約四〇mの河道が検出された。この河道には、長さ約四〇数mの橋が架けられており、基礎構造も良好に残存していた。橋脚は、直径約三〇cmの松材が多く使用され、二本一対で約四m間隔で八ないし九カ所に打ち込まれていた。基礎部は、橋脚列を中心に約四・五mの幅で、縦杭・横木・板材を組み合わせて橋に平行した木枠を作っていた。その木枠の内側の底部に粗朶を敷き詰め、その上部に捨て石を詰め込んでいた。橋脚の数からみて橋は何度か改修されているが、遺物の堆積状況から、最初の橋の構築は室町時代初期で、その後何度かの改修を経て、最終的には室町時代後半から江戸時代初期に大規模な洪水によって崩壊したものと考えられる。柿経は橋の上流側

中心部付近の木枠材に引っかかるような状況で出土した。

8 木簡の釈文・内容

- (1) 「勝如来処千道場菩提樹下坐師子坐諸天(23上29~中1)
(107)×11×0.5 019
- (2) 男子善女人不須為我復起塔寺及作僧坊 (45中25~26)
(198)×11×0.5 081
- (3) 「樂之具皆給与之一一衆生与満閻浮提金(46下10~11)
(182)×11×0.5 019

(3)は二つの断片が接続した。(1)(3)は上端を尖らせる形状をとる。内容はいずれも『妙法蓮華経』で、(1)は卷第三化城喻品第七、(2)は卷第五分別功德品第十七、(3)は卷第六随喜功德品第十八の一節である(『大正新脩大藏経』第九卷における頁・段・行を釈文の下に註記した)。今回の調査では、この他にも木簡・墨書土器が出土しているが、報告書未刊行のため、詳細については、後日刊行の本報告に譲りたい。

9 関係文献

岡山県古代吉備文化財センター所報『吉備』二三(一九九七年)

(中野雅美)